

2024年6月16日 久宝教会 聖霊降臨節第5主日礼拝メッセージ

「幸せなら手をたたこう」

牛田匡牧師

聖書 ミカ書 4章 1-7 節

皆さんは「幸せなら手をたたこう」という歌をご存知でしょうか。

「幸せなら手をたたこう～♪ 幸せなら手をたたこう～♪

幸せなら態度で示そうよ～♪ ほら、みんなで手をたたこう～♪」

という歌です。保育園や小学生など小さい子どもたちでもよく知っている歌かと思います。もちろん、私も知っていました。ですが、この歌の作者がどんな方で、いつ頃、どのように作られた歌なのか、については、私は全然知りませんでしたし、考えたこともありませんでした。そのような中、今年の始めにこの『漫画 幸せなら手をたたこう誕生物語』（西岡由香著・いのちのことば社）という本が出版され、この歌の作者は木村利人さんという方であり、また今 90 歳になられる木村さんが戦後、大学生の時に作られた歌だったということを、初めて知りました。

木村利人さんは 1934 年のお生まれとのことですから、11 歳の時に日本の敗戦を経験されたそうです。ですが、それまでは学校で教えられるままに、日本の勝利を信じて疑わない軍国少年として育ったとのことでした。東京にあった自宅もすべて空襲で焼けてしまい、ご自身も集団疎開をされていましたが、それでも日本が敗れるなどということは夢にも思わなかったそうです。にもかかわらず、実際には日本は敗戦し、学校で語られることも社会で語られることも一変した。そのような中で、何が正しいことなのかが分からなくなってしまった。けれども、そのような中でも、もう二度とあんな愚かな戦争は繰り返さないという「戦争放棄」を掲げる新しい憲法は、自分たちのどん底の経験から生まれた確かな希望であり、新しい時代の道標<sup>みちしるべ</sup>として感じられたのだそうです。

そのような木村さんは、その後、大学生になり、1959 年、YMCA の国際ワークキャンプで 2 ヶ月間フィリピンに行かれたそうです。農村復興のために、現地の青年たちと一緒に僻地にある小学校にトイレを造るという仕事を行ったそうですが、その地でかつて日本軍が村人たちに対してどれだけ残虐なことをしたかということを見聞きし、自分が子どもの頃に聞かされていた日本軍の活躍とは全く違った現実があったことに驚くと同時に、何も知らなかった自分自身にひどく打ちひしがれたとのことでした。フィリピンだけに限らず、他の場所でも、日本軍は軍事侵攻して

いった先々で、兵隊にとって必要な食料などの物資を、後方から補給せずに「現地調達せよ」という作戦とはとても言えない作戦を命じていましたので、兵隊たちは各地で現地の集落を襲い、必要な物資を略奪するという蛮行があちこちで横行しました。現地の住民たちも当然、抵抗しましたから、そのためにたくさんの方々の血が流され、命が奪われていきました。そのような過去がある村に、木村さんはワークキャンプに行ったわけです。その村の中で木村さんが人々から案内されたのは、かつて戦争中に日本の兵隊たちによって、村人たちが女性も子どもも老人たちも皆が教会に集められ、外から鍵をかけられ、火をつけられて殺されたという現場だったそうです。また木村さんが日本から来たと分かったと、「自分の家族は日本兵に殺された。日本人は死んでしまえ」と言って厳しいまなざしを向けて来る村人たちもいたそうでした。

彼は、それまで自分が何も知らなかったこと。また、知った後も何も出来ない自分自身に悶々とし、2ヵ月間のワークキャンプの期間の終了を待たずに、途中で帰国しようかとも悩んでいたそうですが、そんな時に彼が出会ったのが、今日の招きの詞、「詩編」47 編の言葉だったそうです。彼は「手を打ち鳴らし、喜び声を上げ、神に向かって叫べ」というこの言葉と出会い、彼はフィリピンの方々に対する謝罪の思いを、単に自分自身の心の中で思っているだけではなく、自分の態度、行動で周りに実際に示して行かなければ伝わらないということに気が付いたのだそうです。それから彼は炎天下での作業を、それまで以上に、人一倍頑張るようになって、現地の青年たちからも一目置かれるようになり、村人たちからも受け入れられるように変わっていったそうです。

そしてワークキャンプも終わりにさしかかった時に、それまでずっと一緒にペアを組んでいた青年から「自分の父親は日本軍に殺され、母親も傷を負わされた。日本人がワークキャンプに来ると聞いた時から、僕は君のことをずっと殺してやりたいと思っていた。でも君と一緒に働いているうちに、フィリピンの人たちへの思いを態度で表わそうとしている君の姿を通して、僕の気持ちは変わっていった。過去を忘れることは出来ないけれども、赦すことはできる。僕たちは友達として、二度と戦争を繰り返さない世界を作っていこう」と告げられたのだそうです。

この「幸せなら手をたたこう」という歌の曲自体は、もとはフィリピンを長く統治していたスペイン民謡だそうですが、詳しくは分からないそうです。木村さんがワークキャンプに行ったときには、現地の子どもたちが手遊び、ジェスチャー付きで遊び

ながら歌っていた曲だったそうで、木村さんはその曲にフィリピンから日本に帰る船の中で、歌詞をつけ、全ての人が共に生きることができる。赦し合い、愛し合うことができる存在であるということを歌にしました。そして帰国後、歌いやすくて覚えやすいこの歌は、学生たちの集会や、歌声喫茶、キャンプなどを介して、徐々に広まり、5年後の1964年には、この歌を気に入った歌手の坂本九さんが、この歌を作者不明のままレコードとして発売し、全国に広がったのだそうです。

私自身はこの歌を、いつ覚えたのかはもう思い出せませんが、みんなで歌える楽しい歌、それこそ「手をたたこう」「足ならそう」「肩たたこう」の部分をどんどん入れ替えて歌える面白い歌、という位しか思っていませんでした。でも作者の木村さんが言うには、この歌は一人で歌うのではなく、隣の人たちと一緒に体を動かしながら楽しく歌うことで、まさに「態度で示して行く」ものだということでした。「詩編」に謳われている「神様に向かって手をたたき、声を上げ、叫ぶ」というのは、まずは目の前にいる相手に向かって態度で示して行くことなのだ、ということなのではないかと思います。

今回の聖書の言葉は、世界の平和を象徴している有名な一節でした。この「彼らはその剣を鋤に／その槍を鎌に打ち直す。／国は国に向かって剣を上げず／もはや戦いを学ぶことはない」(3)という言葉を含む「ミカ書」4:1-3 は、そのまま「イザヤ書」2:2-4にも記されています。また、ニューヨークにある国連本部の前の庭には、この言葉が刻まれた石碑や、実際に剣を鋤に打ち直している彫像もあるそうです。預言者によってこれらの言葉が語られたのは、古代イスラエル王国が、南北の二つに分裂し、内部も混乱している中、隣国から攻められてもう崩壊寸前という社会情勢の中でした。

4節にある「人はそれぞれ自らのぶどうの木／いちじくの木の下に座し／脅かす者は誰もいないと／万軍の主の口が語られる」とは、現実には全く正反対の状況がある。人々はいつでも敵に脅かされていて、自分のぶどうの木やいちじくの木が常に敵に奪われないかと警戒し、その下に安心してなんて、とても座ってなんかいられないという状況があったということだと思われます。また6節7節にあります「足の萎えた者、追いやられた者を呼び集める」という言葉も、実際にはそのような人たちは戦うこともできず、逃げ出すこともできないわけですから、呼び集められて助けられるどころか、見限られ、見放されていった人たちが多くいたということ

の裏返しだったのだらうと思います。それでも、いやだからこそ、そのように残された人たちこそが、終わりの日には、神様に選ばれた「残りの者」として、呼び集められて、新しい世界を完成させていくのだ、と預言者は語りました。そしてそこではもう「剣は鋤に、槍を鎌に」打ち直され、人々は「もはや戦いを学ぶことはない」世界が実現されるのだと。

しかし、その一方で同じ聖書の中には、正反対の言葉もあります。「9 国々の民にこのことを告げ／戦いの備えをせよ。／勇士を奮い立たせ／戦士をことごとく集めて上らせよ。10 鋤を剣に、鎌を槍に打ち直し／弱い者にも、『私は勇士だ』と言わせよ」(ヨエル 4:9-10)。そして実際にはこのような「戦いの備えをせよ」の方が、古代イスラエル社会の中で、人々が常に見聞きして意識していたことなのだろうと思います。けれども、その戦いの果てにあるのは、荒れ果てた国の姿であり、多くの尊い命が失われ、傷つき疲れた人々の姿に他ならないということもまた、古代社会の人々もそれぞれに、過去の経験から学んでいたに違いありません。

だからこそ、理想論と言われたり、絵空事と言われたり、実現不可能と言われたりするかもしれないけれども、それでもかつて預言者が預言した通り、争うことのない世界を夢見て、その実現のために努力し続けること、諦めないことが肝心です。人と人とは対立し、憎しみ合うことも出来ますが、しかしまた、たとえ対立した過去があっても、その事実を越えて赦し合い、共に歩むことも出来る存在です。木村さんの作った「幸せなら手をたたこう」という歌は、その事実を教えてくれています。心の中に黙って秘めておくだけではなく、実際に行動で、態度で示して行くことで、隣りの人から隣の人へと平和を造り出す小さな業は広がっていく。

来週 6 月 23 日は、沖縄の慰霊の日です。この地上に平和を実現していくためにも、かつての戦争の記憶と、今も世界の各地で行われている戦争や紛争の事実に向き合い、その現実を知って行かねばなりません。「幸せなら手をたたこう。幸せなら態度で示そうよ」。私たちは互いに争い合うだけではなく、手を取り合い、助け合い、赦し合い、共に平和を創り出しながら生きていけるということを、それぞれの身をもって、行動で表わし、態度で示して行く歩みへと、今日もまたここから導かれて行きます。